ルポエッセイ：「感じて歩く」を読んで

新聞書評欄で、著者の言葉「自立とは自己決定であり、『ひとりでできる』ことでない」が目に止まり、「感じて歩く」を購読した。

著者は、４才の時の目の手術後「シーン（風景）＋レス（ない）」となり、今は通信社で翻訳の仕事に携わる傍ら、「シーンレスの立場から、そのことがどのようにユニバーサルな世界に応用できるかを常に考えている」ルポライターでもある。

「シーンレス（全盲）」は、「『風景がない』という和製英語で、障がいをニュートラルな特色としてとらえたい」という著者の思いを込めた著者の造語である。
確かに、我々は移動しようとする時、周りの風景を見ることで立ち位置、方向、等々の情報を得ており、始めての所に行くと「周りをキョロキョロ見る」ことからも、如何に風景からたくさんの情報を視覚から得ているかは容易に理解できる。

今回は、白杖で歩くことだけでなく、超音波歩行補助具、点字ブロック、盲導犬、エレベーター、エスカレーター、バス、鉄道、等々を含めて「移動行動」に焦点を絞り、自らの体験、経験、取材から、シーンレスの方が一歩一歩をどんなに極限の緊張状態で戦場と思える危険一杯の状況を移動しているかのルポ記でもあった。
確かに、シーンレスの方がプラットホームから転落したニュースはしばしば耳にするし、点字ブロックの上に自転車や荷物がはみ出しているものよく目にするし、正に移動行動は命をかけた「危険一杯の戦場」と言えるだろう。

我々が無意識的に風景を目して膨大な情報量のお陰で容易に移動行動してるだけに、シーンレスの方の白杖等からの音や触感覚から情報を得ようと極限の緊張状態で移動行動をしている具体的な日常の様子を本書で知ると、当事者「一人一人の障害状況を理解する」なんて、そうそうに出来るものでないと思った。
本書にも触れられていたが、「解りっこない」ということをまずは解ることでないだろうか。

思えば、我々とてある局面では出来ないこと、手助けが必要なことが多々ある。
そうした意味では、我々、誰もがそれぞれの障害状況を抱え、周りの助けを必要としている。
だからこそ「お互さま」であり、「相互に輔け合いながら生きて行きましょう」と言い合える雰囲気が、今の世に求められいるのでないだろうか。

阿部幸泰　　（2012 年 7 月 26 日　記）